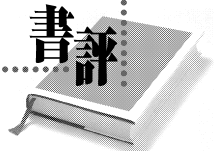


書評



P・フィレンチ, J・スミス, D・シャイアズ, M・リード, M・レイン 編著, 岡崎祐士, 笠井清登 監修, 針間博彦 監訳

精神病早期介入

回復のための実践マニュアル

井上新平

統合失調症の治療は発病早期から開始したほうが予後をよくできるという発想は古くからあり、わが国でも昭和30年代初頭、群馬大学精神科の臺弘教授は、同様の発想で再発予防5箇年計画(生活臨床)を立ち上げた。成果はその後の長期予後調査で明らかにされ、予後予測因子として最も重要なのは治療開始後2年間の経過であった。1990年代に入り、精神病の早期発見と早期介入がオーストラリア、ノルウェー、イギリス、アメリカなど世界各地で取り組みられ、その業績は日本でもしばしば紹介され活字にもなっている。本書はそのような世界的潮流のひとつ、イギリスにおける精神病早期介入チームの活動をまとめたものである。以下中味をごく簡単に紹介する。

「はじめに」で、早期介入の位置づけが記されたあと、テーマ1「アクセスと関係作りの改善」で、受診経路、関係作り、治療の展開などが扱われる。DUPの短縮が全国的優先事項とされ、中央値3カ月、6カ月を越えないことを目標としていることなど目を見張る。抗精神病薬についてはマニュアルらしく、何をどう使えばいいかがかなり断定的に書かれている。また治療関係作りの重要性が随所で強調される。

テーマ3「回復と普通の生活を促す」が、精神保健改革の精神から見ても最も強調したいところであろう。実際多くのページが割かれている。扱われているテーマは動機付けの問題、就労、再発予防、自殺予防、治療抵抗性の問題などで、最後に希望の育成に触れられている。精神病の初発という体験が当事者にとっていかに外傷的かというところからはじまり、どういうことが希望のなさに関連するのか、希望と関連するのは何々なのかが論じられる。希望を促し育成していくことは究極の目標であり治療やケアの集大成であることが分かる。ここで述べられている方法がベストかどうかについては見解が分か

れるかもしれない。しかし希望回復を旗頭にしていることは改めて重く受け止めなければならないと感じられた。

テーマ4「家族に対する関わりと支援」では、個人的関心から家族感情表出(EE)がどのように扱われているのかに注目した。イギリスでは、EEは家族に対するレッテル貼りであるという批判的な意見も多いと聞く。本書では、家族がケアプランにルーチンに関わればEEを抑える行動に対する啓発に役立つといった、微妙ながら研究成果が反映された見解になっている。

紙面の関係で啓発や専門家の研修について触れないのは残念である。全体を通して背景、エビデンス、実践、要約、示唆などが整然と記され、また数多くのケース記載があり大変理解しやすい。

イギリスの特徴は、早期介入チームが地域精神保健福祉サービスに組み込まれていることである。1999年に始まった精神保健改革10年計画における7つの全国基準の4番目「重度の精神障害へのサービスの充実」には積極的アウトリーチチーム、危機解決/家庭治療チーム、早期介入チームが新たに設けられ、それぞれ長期慢性患者、急性期患者、発病早期の患者に対応しケアプログラムアプローチによるサービスの徹底が図られた。入院から地域への移行の歴史の中で早期介入への取り組みを読むと、まさに壮大なドラマを見ているような気がする。

本書を通して、わが国のこれからの精神保健改革を考える上での数々のヒントを得ることができる。一読に値する書であった。

(高知大学医学部神経精神科学教室)

●A5 536頁 2011 定価5,250円(本体5,000円+税) 日本評論社